

江戸時代の京都における医の倫理の史的考察

守屋 正

序言

本講演は江戸時代の京都における医の倫理が如何なる指導原理により行われたものであるかを、史的資料により述べるものであるが、この根幹を曲直瀬玄朔の「当門下法則」におき、その殆んど同文で、明らかに玄朔の「法則」に根拠をおいた門人山脇玄心の「養寿院医則」が、大きく江戸時代の特に初期から中期にかけて京都医学の倫理に絶大な影響を及ぼしていることを考察しようとするものである。山脇家には全国から門人が蝟集しているので、その影響は全国に及んだので、江戸時代の日本の医の倫理の史的考察としてもよいと思っている。

一、曲直瀬玄朔の思想の史的分析

これには養父の初代曲直瀬一溪道三（一五〇七—一九四）の思想的変遷を知る必要がある。

一溪道三が天正十二年（一五八四）に七十八歳でキリスト教に入信したことはおそらく真実であろう。当時の日本側の文献はないが、フロイス（C・一五三—一九七）が『日本史』の第五章（第二部七〇章）において「日本のもっとも優れた学者の一人で重立った医師である都の住人（曲直瀬）道三の改宗について」の詳細な記述がある。（松田毅一・川崎桃太訳『フ

ロイス 日本史』5、一七八ページより一九〇ページに至る。

これに関して詳述は避けるが、府内の学院の上長ベルシヨール・デ・フィゲイレドが奇病にかかり、それを治療すべく京都に來たり、一溪道三により治療し、道三はフィゲイレドの精神的影響を受けた。つまり曾って相国寺にあって、仏教的に医の倫理を求めるのに熱心であった一溪道三は、キリスト教に自分の求めていた医の倫理を見付けて、感動し、當時在洛の神父オルガンチノにより洗礼を受け、靈名をベルシヨールと名付けられたのである。

一溪道三の入信は彼の多くの門弟に大きな影響を及ぼし、当時受洗する弟子があまり多かつたため、儀式用の道具が不足した記録がのこっている。一溪道三はあまりにキリスト教に熱心であったので、彼は法印の身であったので正親町天皇から、あまり教会に関係しないように注意されている。

一溪道三が容易に受洗したことは、キリスト教の倫理性が、医の倫理に理想的であったことが重要な原因であろうが、フィゲイレドがゴア生まれのインド人であったことも、入信の抵抗が日本人として少なかったのではないかと思う。一溪道三は文禄三年正月八十八歳で没し、墓は京都寺町通今出川上ル十念寺にあり、法名は宝智院誓誓永順であるので、キリシタンになり切っていたとも考えられないが、彼は法印であったので、仏寺に葬られたので、檀家制度のなかったこの時代には思想は比較的自由であったものと思う。

二、女朔に及ぼしたキリスト教の影響

曲直瀬女朔道三（一五四九—一六三二）は二代目で一溪道三の妹の子で養子であるが、彼は一溪道三が受洗した時は三十六歳であった。いわば最も油の乗り切った年齢である。こうした時に養父の一溪道三が受洗し、門人多数が入信したので、女朔も受洗しなかつたとは申せない。確かな史料がないだけである。熱心なキリシタンか、キリスト教の理解者であったであろう。その後の彼の生涯の大部分は、日本歴史上最もキリスト教の盛んであった時代である。概説すると、天正

少年使節がヴァリニアノに率いられて帰国し、秀吉に京都で謁見した天正十九年（一五九二年）は玄朔四十三歳の時である。当時ポルトガルの風俗は秀吉以下が愛好し、秀吉は牛肉を食べ、ポルトガル風の洋服を着用し、多くの武士たちにもポルトガル風が流行した。文禄三年（一五九四）には京都にフランシスコ会の教会が建立され、聖アンナ、聖ヨセフ両病院が現在の堀川通四条下る西入（綾小路通と岩上通を中心とした妙満寺跡地）に建築され、多くの病人を収容した。玄朔はこの時四十六歳であり、キリスト教の救貧、救病事業を目撃しているわけである。

また天正十九年（一五九二）頃より少年使節の将来した印刷器により、『サントスの御作業の内抜書』、『ドチリイナ・キリシタン』をはじめとして、多くのキリスト教の印刷物が続々と刊行された。当時の最もインテリ階級としての医師はこうしたキリスト教の刊行物を読む機会は極めて多かつたと思わなければならない。またキリスト教を中心とした西洋文化・文明は想像以上に日本に大きく影響したことは現存する造品などによってその一端が想像出来る。

フランシスコ会を中心とした二十六聖人の殉教（一五九七）は玄朔四十九歳で、これは当時のキリシタンに相当の動揺を与えたに違いない。翌年秀吉死去し、キリスト教の布教は再び寛大となった。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦の際は、キリシタン大名が兩陣營に二十名もおり、信者数は当時全国で七十五万人と称せられていることでも、如何にキリスト教が日本の上下に浸透していたかがわかる。（現在の日本のキリスト教徒は五十万人である。）

慶長六年（一六〇二）には京都下京に教会が再興されている。玄朔五十三歳である。（その前年オランダ船リーフデ号が豊後に漂着したことは重要である。）

三、カルロ・スピノラの来日とその影響

前項と関連のあることであるが、私はカルロ・スピノラが来日し（慶長七年）、京都に慶長十年（一六〇五）以来在住した影響は当時の学問愛好者に対して無視できない大きな影響を与えていると思う。これはカルロ・スピノラに限らずその他

の神父などの聖職者も影響していると思うが、彼の京都のインテリに与えた影響は甚大と想像するので、ここに一項を説いて、彼の行動を少々詳細に述べてみたい。

カルロ・スピノラ（一五六四—一六二二）は北イタリアの名門タッサロ伯の子で、ナポリのコレジヨで哲学（医学は哲学の中に含まれていた）を、ローマのコレジオで天文学と数学を学んだ碩学である。ローマでは特にグレゴリウス暦を編纂したクリストフス・クラウイスに師事した。

私は彼の来日の経緯を重視する必要があると思っている。もともと一五三四年にイグナティウス・デ・ロヨラ（一四九一—一五五六）により創設され、日本に天文十八年（一五四九）に来日したイエズス会士フランシスコ・ザビエルもその創設者の一人であるが、イエズス会はもとルターやカルヴァンの宗教改革に刺激されてパリで結成されたカトリックの修道会である。これは一五四〇年に法王パウルス三世により認可され、教会の内的改革、異端撲滅、異教世界への伝道をモットーとし、軍隊組織の用語を用い戒律の極めて厳しいものであった。

カルロ・スピノラの来日の模様を知れば、イエズス会の本質がわかり、彼の来日迄の辛酸が天平時代の鑑真和上の辛酸に優るとも劣らないことがよくわかる。当日のイエズス会の聖職者が文字通り身命を賭して宗教のために、布教のために来日したことを十分に認識する必要がある。

話は少々脱線するが、日本の歴史に外来文化の渡来の大きな歴史が三回ある。第一回は隋唐を中心とした中国文化の渡来で、第二回目はキリスト教の伝来と西欧文化の渡来である。第三回は江戸時代中期以来の蘭学の渡来があるが、本格的には明治初期よりの欧米文化の渡来である。この内第一回と第三回は成功し、日本の文化を一変した。第二回は徳川幕府の徹底的弾圧により壊滅した。第二回のポルトガル（主として）文化の影響は当時の外来語などに少なからず残っているが、キリスト教の弾圧は徹底していた。しかしこのキリシタンの時代が九十年も続いたことは認識しなければならぬ。それは歴史上決して短い時期ではないからである。

キリシタンは政治的理由の弾圧により撲滅された。これは日本人は当然の史実と思つてゐるが、世界史上では稀有の現象である。フス(C・一三七〇—一四一五)、サウフォォナローナ(一四五二—一四九八)、ジョルダノ・ブルーノ(一五四八—一六〇〇)などの殉教は全て宗教的理由の殉教であるが、日本の殉教は全て政治的理由による。ローマの殉教も多分に政治的理由であつたが、遂にコンスタンティヌス帝(三一三)により公認宗教の一つとされた。

また日本で何故キリスト教が歓迎せられたかもこの時代を理解するために一応知つておく必要があるので簡述する。當時日本は政治的変動期であつた。鎌倉時代から日本の民衆のもつ宗教的エネルギーは漸次頂点に達し、室町期の一向一揆は特に劇烈で、加賀では一世紀にわたり一向宗独裁時代が出現したほどである。民衆は激しい転換の時期には強い生活の原理を切望する。一向宗はもとも多神教である仏教の一宗派であるが、極めて一神教的な性格を持つ。この宗教の形態は単一神教(ヘノセイズム)である。そこへ純粹の一神教(モノセイズム)としてのキリスト教が伝来した。しかも下層階級の人權を認め、特に当時無価値に等しい女性の権利を認め、これを積極的に保護し、救貧、救病の愛の精神を実施し、布教したので、忽ち大衆の歓迎するところとなつた。ヨーロッパ文明の伝来、その貿易の利益も多く西国大名が歓迎し、キリスト教を保護するのに役立つ。

キリスト教の日本での伝播はこうした諸因子の集合によるものであるが、特に優秀な聖職者が来日したことも大切なことである。上記のカルロ・スピノラの来日などは特に注目する必要がある。

カルロ・スピノラは一五九五年ジェノアを出帆し、一度船が難破して家に帰り、再び家人の引き止めるのをふり切つて、リスボンから一五九五年出帆し、途中難破し、ブラジルに漂着し、その後イギリス軍艦に拿捕され、イギリスに連行され、再び苦心して遂にリスボンから来日した人で、実に七カ年を要している。この執念、この宗教的熱意は現代のわれわれの到底想像できないことである。無神論者といわれている現代の日本人はこの時代の歴史を考えるのに、想像以上の想像をもつて考慮しなければならない。

カルロ・スピノラは慶長十年（一六〇五）に京都に七年間住み、その間に教会内に附属のアカデミアを設立して数学を講義した。彼は後陽成天皇や將軍秀忠や諸大名にも西洋の知識を教えたと伝えられている。こうした碩学が七年間在洛した間に玄朔と無関係であった筈がないと、私は想像する。

勿論典型的なキリシタン大名高山右近、内藤如安などの影響も無視できないし、皇弟八条宮の典医本郷意伯（寛永十年△一六三四△に逮捕）や宮の妃もキリシタン大名京極高知の娘であった。こうして宮中の奥や幕府の大奥（じゅりあ・おたあは有名）までキリスト教は浸透していた。

刊行物も慶長十五年（一六一〇）に京都で『こんてむつす・むん地』が刊行され、現存している。『新約聖書』の完訳も慶長十八年（一六一三）京都で刊行されていたという記録がある。このことは極めて重要なことである。

四、キリスト教の禁教と延寿院医則の発表

慶長十九年（一六一四）に幕府はキリスト教を禁教し、教会を破壊し、高山右近らを国外追放した。カルロ・スピノラは慶長十七年に長崎に行き、長崎で元和四年（一六一八）逮捕監禁された。彼は四年間大村の牢に入り、辛酸を嘗めて、元和八年（一六二二）に長崎の大殉教の際五十五名とともに火刑に処せられ殉教した。禁教後日本を追放され、その後徒歩でエルサレムに行きローマで神父となり、帰国後殉教したペトロ岐部、また海路ローマに行き神父となり、帰国途中客死したミゲル・ミノエス（美濃の人）の信仰の強さを銘記する必要がある。

これより先、元和三年（一六一七）玄朔六十九歳の時、彼は延寿院の医則を十七カ条にして発表した。以下それを記す。（ここでは説明の便宜上、一連番号を付し、且つ読みやすい現代文とし、「延寿院医則十七カ条」と称することにする。）

延寿院医則十七カ条

一、すべて神仏によって示された正しい道に従わなければならない。

二、人々に慈愛親切でなければならぬ。

三、医学を教えることは選ばれた人々に限定せらるべきである。

四、口伝えに教えられた治療法については、許可なくしてみだりに口授してはならない。

五、あなた方はこの門流に属していない医者たちと合盟提携してはならない。

六、わが門流の後継者及び子孫はすべて師の方法に従わねばならない。

七、もし門下の者が医業をやめたり或はその後継者の無い場合には、家伝の書籍はすべて延寿院に返還するものとす。

八、殺生をしてはならぬ。また猟や魚釣を好んではならぬ。

九、毒薬については医書には見られるが、本門では先師以来これについての伝授は禁じられている。また他の医者から毒

薬についての講義を受けてはならない。墮胎の薬を伝えるものもあるが決して施してはならない。

十、あなたは好ましくない病人をもつとめてその苦しみから救わねばならぬ。人々にわからせないようにして徳の高い行

動をせなければならぬ。

十一、あなたは利欲をむさぼつてはならぬ。むりに有名になろうとしてはならぬ。治療の謝礼をもつて来ない病人があつ

ても、これをとがめたり叱つたりしてはならない。

十二、治療がうまく行かないためその病人が他の医者薬をもらうようなことがあつてもあなたは悪くとはならない。

い。

十三、他医のあらや欠点をしやべつてはならない。

十四、自分というものをよく反省し修養をおこたつてはならない。

十五、婦人の室に於て見聞したことは善悪にかかわらずしやべつてはならない。また婦人診察中にみだらな心を起しては

ならない。

十六、藥劑調合や医書講義の際に見聞したことは善悪にかかわらず口外してはならない。

十七、贅沢を好んではならぬ。もしそういう生活を好むならばその心はますます貪欲になり慈愛親切の道をふみはずものである。つとめて儉約を守らねばならぬ。

右十七カ条並に学寮の法度をもし違背するものがあれば門下の籍から除名し、更に重科の者に対してはもつと懲罰は重くなるであらう。

元和三年丁巳五月吉旦 延寿院玄朔（花押）

右の条々、違背せしむるに於ては、其の籍を削らるべし、猶以て医道の冥加之れ有る可からざる者也。

門弟在判

右定め置かれたる法則はよろしくその旨を謹持すべし、もし違背せしめられる者に於ては、医道の冥加有るべからず、薬師如来十二神将日本国中大小神祇殊に生縁の氏神冥鑑有るべからず仍つて誓詞件の如し。

元和三年丁巳孟夏

学寮門弟在判

鈴木貞庵道珠[㊦]

和計三桃子[㊦]

というまことに厳格なものである。

この元和三年は禁教会が発令されて三年目であることは注目しなければならない。当時物情は騒然とし、聖職者やキリシタンは次つぎと捕縛され、宣教は全く不能となった。玄朔も六十九歳では最晩年に入り、彼としても多年考えてきた医の倫理をまとめて後生に残したかったに違いない。

この十七カ条に多分にキリスト教の影響が考えられることは後に詳述するが、全てがキリスト教の思想ではない。それ

よりもこの十七カ条には宗教的な匂いが殆んど感じられない。このことは注目すべきことで、敢えて申すと、第一条に「神仏によって示された正しい道」という項があるが、これが玄朔の真意か、それともキリシタン弾圧後の一種のカモフラージュかにわかに断定できない。しかしこの一カ条を入れることは当時安全な道であったことは確かである。同様のことは第八条では殺生を禁じている。これも一般倫理であるが医の倫理とは少しニュアンスが異なる。しかもこの思想は明らかに仏教思想であり、日本古来の思想である。玄朔はこうした点にも細かい神経を使っている。殊に門弟一同による「薬師如来十二神将日本国中小神祇殊に生縁の氏神」の文字に至っては、玄朔はキリシタンの影響がこの十七カ条に含まれていないことをくどいほど述べていると私は思うのである。私には玄朔はペトロ岐部、ミゲル・ミノエス、その他の殉教者の如く熱烈なキリシタンでなく、進歩的なインテリとして、キリスト教、仏教、儒教などの宗教の人類的な普遍性をもつ思想の持ち主ではなかったかと思われるのである。この断定はむずかしいが、彼がデウスを唯一の神として身命を賭しても信じていたとは思われないが、キリスト教の極めて優れた倫理性は認めていたことであろう。(玄朔は江戸麻布祥雲寺に葬られた。)

五、延寿院医則のその後の発展

玄朔の門人に山脇玄心(一五九三—一六七八)がいた。東洋の養祖父である。彼はこの医則をもとにして、「養寿院医則」を作った。これが代々山脇家に伝わった。延享三年(一七四六)の山脇東洋、天明六年(一七八六)の東洋の孫、東海のもの私の手許にその写しがあるが、全く玄心のものと同文である。左に養寿院医則を掲げる。(一連番号を付し、延寿院医則と同文のものは同文とする。)

養寿院医則十七カ条

一、(一)が一と順序が変わっている)

二、平生忠信正直にして邪路に趣くべからざる事（「神仏によって示された」が削除されている。順序は一と二と変更）
三、四、五、六、七は全て同文。
八、殺生を禁じた項は十七にまわし、九が八になっている。以下順番が一つづつ違う。従って八と九と同文。墮胎を禁じていることに注意。

九、同文であるが本文を書く。「怨讐の人たりとも治を施すに臨んでは救苦の心を第一として他念を起すべからざる事」
十、十一、十二、同文。

十三、自己の保養を慎んで壮健なるべき事（漢文では延寿院医則とは略同意である。）

十四、同文であるが、後段の「また婦人診療中にみだらな心を起してはならない」が削除されている。

十五、「薬剤調和或議論講談の節は安静にして浮躁なるべからず尤異事ありとも驚動すべからざる事」となっている。

十六、同文。十七、延寿院医則の八と同文。

以上が山脇玄心が延寿院医則を基として作った医則で、これは代々山脇家に伝わり、京都は勿論、ひろく全国に亘った山脇社中に伝えられたものである。

六、延寿院医則の考察

この考察の一部は既述したが、この医則に多分にキリスト教の影響が認められることを指摘したい。

玄朔は当時キリスト教の各種の刊行物を読んでいたと思うが、京都ではマタイ伝が翻訳されていたと言われるので、「山上の垂訓」が従来の仏教などの日本にあった宗教思想になく、最も普遍的に人間を感動さすものなので、これを中心に解説を試みよう。

第二条の慈愛はミゼルコルジアで、キリスト教の真髄である。第九条の墮胎を禁じた項は当時として最も注目すべき項

目である。徳川幕府は後年三回に亘り墮胎(間引き)の禁令を出しているが、これは人口政策によるもので倫理的なものではない。延寿院医則のこの項は毒物の禁止とともに明らかに医の倫理より出ている。これはキリスト教精神である。第十条は愛敵精神でアガペーの愛が説かれている。また後段は「右の手のしたことを左の手に知らすな」の精神である。第十一条も「幸いなるかな、心の貧しき者」その他のキリスト教精神である。第十三条(第十二条も含む)は「汝等もし人の過失を免さば……」の思想である。第十五条は「すべて色情をいだきて、女を見るものは、既に心のうちに姦淫したるなり」の思想で、当時として婦人の権利を認め、一夫一婦制を厳守したキリスト教の重要な思想で、従来の日本にはなかつた思想である。第十七条は「汝ら神と富とに兼事まかしうること能わず……何を着んと体のことを思い煩うな」の思想である。このように考察すると、玄朔はイエスを治癒神とみたキリスト教の思想に影響を受けているだろうが、さらに多分にキリスト教の倫理をこの医則に盛り込んだことがわかる。これらのことは碩学カルロ・スピノラらの大きな影響ではなかつたかと思うのである。

七、キリスト教とヒポクラテスの「誓」との関係

ここでさらに注目しなければならない問題にわれわれは逢着する。それはキリスト教の医の倫理がヒポクラテスの影響を大きく受けている事実である。衆知の如く、ギリシア文化はアラビアを経て西ヨーロッパに伝った。勿論一部はギリシアから直接ビザンチンを経てヨーロッパに伝っている。ヒポクラテスの「誓」は中世末期頃からヨーロッパではギリシアの神々の名の代りにイエス・キリストの名において誓言され、その前にアラビアではアッラーの名において誓いを立てられている。玄朔はスピノラからヒポクラテスの「誓」をキリスト教の医の倫理として教えられていたものと思う。

私はここに一つの実例として十二世紀のビザンチン時代の古写本をこの問題の解説の一助としよう。この古写本は今ハヴァチカン図書館に所蔵されており、ロベルト・マルゴッタ著の『図説医学の歴史』に挿絵として掲載せられている。こ

れを判読すると、その形が十字架になつていて、キリスト教と関係していることがわかる。しかもその第一行目は現代文に直すと、*“Ek tod kard tou Itronaktou opou, kard' o (ヒポクラテースの誓いのままをしるす。これによれば……)*と書いてある。即ちヒポクラテースの「誓」と中世のキリスト教の関係が明瞭である。そしてこの文にはアポロンやアスクレオピオスのギリシヤの神々の名はなく、イエス・キリストの略字と思われるものがはじめの所に書いてある。そしてその書かれている順序が、毒物を与えてはならないことと墮胎の器具を与えてはならないことがはじめの方に書かれている。また謝金 (*misos*) というところを悪意 (*shinos*) という文字に替えている。これはいかにも宗教的なものであることを感じさせる。また「誓」でわれわれにも違和感を感じさせる (そのためにエーデルステンはこれをピュタゴラス派の作と主張している) 碎石術の項目は削除されている。

しかしヒポクラテースの「誓」の中の多くの項目、「神々に誓う」こと、「門弟にのみこの術を教え伝える」こと、「毒物を与えず、墮胎を禁ず」こと、「病者を助くるを旨とし、他のよこしまな意図をおこさぬ」こと、殊に「色情より遠ざかる」こと、「他人の秘密を口外しない」こと、などは全て延寿院医則にも述べられており、玄朔がキリスト教の医の倫理として編述したことは、実は遠くヒポクラテースの「誓」そのものに淵源を發していたことがわかるのである。

むすび

江戸時代の初頭、元和三年に曲直瀬玄朔が編述した「延寿院医則」は、当時弾圧され禁止されたキリスト教の精神により、その宗教色を抜いて作られたものであり、このものはさらに遠く古代地中海文化としての所謂ヒポクラテースの「誓」にその源流があつたことを述べた。

江戸時代の医の倫理とギリシヤの思想が相通じていたことは興味あることとして発表する次第である。また人道的に真理を含む思想は、如何に政治的弾圧を加えられても、必ず何らかの形を保って生き残るものであることを話したかったの

である。(年齢は全し教える年である。)

A Historical Consideration of the Medical Ethics in Kyoto at the Times of The Edo-era

Tadashi Moriya, M.D.: Chairman, /Japan Society of Medical History

It is considered that the medical ethics in Kyoto in the times of the Edo-era or Tokugawa Shōgunate was greatly influenced by “The Precept of the School” or “The 17 Medical Regulations of Enju-in” prescribed by Manase Gensaku (1549-1631). These medical regulations were taken over by one of his talented pupils Yamawaki Genshin (1553-1678), and named “The Medical Regulations of Yōju-in”, and were continuously succeeded by the family. It formed the medical ethics of the whole city. These regulations were then spread all over Japan by the doctors who studied in Kyoto under their influence.

The contents of “The Enju-in Medical Regulations” and “The Yōju-in Medical Regulations” are similar. One of the characteristics of these regulations is that one can find in them much influence of Christian ideas.

Manase Ikkei Dōsan (1507-94), stepfather to Manase Gensaku, became a Christian in 1584 at the age of 78 and it can be assumed that his son-in-law Gensaku, who was then 35 years of age must have been much influenced both by his Christian father and by the trend of the times. In the “Regulations”, such Christian ideas as “love”, “prohibition of abortion”, “prohibition of administration of toxic sub-

stances”, “love of enemy”, “precepts of the Surmon on the Mount”, “the rights of women” and “observance of monogamy”, can clearly be traced. Christian influence must also have been made by Father Carlo Spinola who came to Kyoto in 1605, worked there for 7 years and afterward died a martyr in Nagasaki in the 8th year of Genna (1622).

Father Spinola is also known as a scholar. He studied philosophy at the University of Naples, and astronomy and mathematics at the University of Rome. It can be supposed that he gained the knowledge of “The Oath of Hippocrates” in his studies of philosophy. The prohibition of abortion and that of the use of toxic substances mentioned in “The Enju-in Medical Regulations” are thought to have found their origin in “The Oath”.

In the Vatican Library, an old manuscript of the 12th Century written in Greek is kept. In manuscript the words are arranged in a shape of a cross and the sentences begin with “*Εκ τοῦ κατὰ τον Ἱπποκράτου ὄρκου, καθ’ ὃ*” (This is exactly same as “The Oath of Hippocrates”. According to the Oath etc.).

(What should be noticed in the manuscript is that the names of Greek gods which are written in the original ‘Oath’ are taken off, and the item of lithotomy is excluded, and the items of the prohibition of abortion and that of the administration of toxic substances come much ahead of other items, thus changing the order of the original arrangement of the items.)

The manuscript not only shows us clearly its close relation to Christianity but also suggests that the Ethics of “The Enju-in Medical Regulations” has its origins derived from ancient Greece. Is it interest to observe how the medical ethics in the times of Tokugawa Shōgunate in Japan had its roots deep in the old Mediterranean civilization?